



- 永代共養墓について
- ぶつぶつ雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院NewS
- メールを送る☑
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小僧主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつ仏グッズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれび
- ふしぎな密教法具
- 地図・アクセス
- サイトマップ

検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を\[2\]](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を\[1\]](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高!](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかか\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかか\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の同窓会](#)

仏教一年生

山田真美・著



作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

[プロフィール紹介](#)

第7回 お葬式の意味

B! 0 チェック いいね! 2 Tweet

前回、ゾロアスター教徒の鳥葬について少し書いたところ、それを読んだ友達のひとりから次のようなメッセージが届きました。

「自分が死んだら、やっぱり鳥葬にしてほしいと思います」

それは、とても短い、けれども妙に心に響く言葉でした。このメッセージをくださったのは40代 半ばの独身男性です。おうちは代々仏教徒で、本来、鳥葬とは縁もゆかりもないはず。けれども最近、少し体調を崩して病院に通っていると風の便りに聞いていましたので、読みながら私は、(ああ、この人はまだ若いけれど、「死」を至近なものとしてとらえ、自分自身の一部として受け止めながら、このメッセージを書いてくださったのかも知れない。そして、誰かにそれを聞いて欲しかったのだろう)と思いました。彼が理系の人なので、私はあえて情緒的な話は一切やめて、次のようなお返事を出しました。

「ゾロアスター教における鳥葬文化は、森林伐採による猛禽類の減少で、いまや風前の灯です。遺体を食べてもらおうにも、肝心のハゲワシやタカが激減してしまいましたから。信者さんの多くが森の少ない都市部に住んでいるため、この問題は深刻です。ゾロアスター教徒に限らず、ヒマラヤの仏教徒のあいだにも、ごく一部ですが鳥葬文化は

- [第16回 不老不死のお酒](#)
- [第15回 アンチエイジング](#)
- [第14回 女子力不足](#)
- [第13回 仏のレッスン](#)
- [第12回 母と子をつなぐ道](#)
- [第11回 座敷わらし](#)
- [第10回 夢のお告げ](#)
- [第9回 犬に引かれて](#)
- [第8回 生まれ変わり](#)
- [第7回 お葬式の意味](#)
- [第6回 不思議なご縁](#)
- [第5回 生きるための勇氣](#)
- [第4回 祖母の形見](#)
- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



残っているようです。そのほかに、魚葬という弔い方もあります。こちらは文字どおり 遺体を魚に食べてもらう弔い方ですね。これらの葬儀では、死体を焼いたり埋めたりせず、鳥や魚、プランクトンや微生物に死者をまるごと食べてもらうわけ です。痛々しいと感じる向きもあるかも知れませんが、『エコ』という観点から見れば、これ以上ないほど『エコ』な弔い方であると言えるかも知れません」

死者の弔いについて語るときに「エコ」という言葉を持ち出すのは、いささか突飛な感じがするかも知れません。けれども遺体処理の問題は、実は究極の環境問題でもあるのです。

たとえば火葬をするには燃料が必要で、そのためには「木を切り倒す」など、何かを犠牲にしなければならない。そのうえ悪臭や煙害も出ます。もちろん、こうした問題はテクノロジーの進化につれて改善されてはいますが、そこに遺体がある限り、それを荼毘に付そうとすれば多かれ少なかれ環境問題が発生することは 止められません。

「もちろん、鳥葬や魚葬にも問題はあります」

友達に宛てたメッセージはさらに続きます。

「鳥や魚に遺体を食べてもらう、そのための前準備がかなり煩雑(はんざつ)で、葬儀の担当者は事前に遺体を切り分け、骨を細かく砕き、脳みそをきれいに取り出して並べるなどして、鳥や魚が食べやすいようにしておかねばならないのです。たとえば分別ゴミの収集は手間がかかるものですが、鳥葬や魚葬などのいわゆる『エコ』なお葬式も、実はとても手のかかるものなのです」

すると、これを読んだ友達からは、

「葬儀は、あまり他人に迷惑をかけない方法がいいですね」

というお返事が届きました。彼は日頃から細かな気配りの出来る人なので、自分が死ぬときはなるべく他人に迷惑をかけたくないのでしょう。それを読んで、私も色々と考えてしまいました。

人の手をわずらわせることは、私も性格的に苦手です。だから、死ぬときはなるべくシンプルに死にたい。お葬式もお墓も要らないから、荼毘に付したら適当にそのへんに散骨しておいてくれればいい。そう思っています。

ただし、たとえ本人がそう思って遺言状まで書いていたとしても、それが本当に実行されるかどうかはわかりませんよね。なにしろ葬送を執り行なうのは残された人たちであって、死者本人ではないのですから。

「死ぬ」とは何か。インドに住んでいた6年間、私はこのことを毎日のように考えていました。というのも、インドでは他人の遺体を見る機会がとて多かったからです。板の上に寝かされて火葬場に運ばれてゆく白いパジャマを着た遺体や、故郷へと向かう列車に乗るために鉄道駅に寝かされている遺体など、インドに住んでいたあの頃、遺体は日常の風景の一部でしかありませんでした。飛行機事故で亡くなった351人分の死体の山を歩いたことさえありました。

こうした、日本の感覚からすれば「非日常的」な風景を日常的に見てきた私にとって、「死ぬこと」とは、イコール「死体になること」なのです。死体を放置すれば、すぐに腐敗がはじまる。だから残された人たちは一刻も早く、それを処理しなければなりません。

むかし、ペットとして信州の山小屋で飼っていた愛馬が脚を傷め、そこから黴(ばい)菌が入ってアツという間に死んでしまったことがありました。こう言うと皆さんは驚くかも知れませんが、あのとき「悲しい」とか「淋しい」といった感情から私を救ってくれたのは、目の前に横たわった馬の死体の絶対的な「大きさ」と「重量」でした。

昨日まで元気に走り回っていた馬が、今はもうピクリとも動かない。そして、どんどん冷たく、硬くなっている。巨大な死体を前にして、困り果てた私は近所の友達を3人呼びました。皆で力を合わせて馬を動かそうとしたのです。しかし押ししても引いても微動だにしないので、ついには小型のパワーシャベルまで動員。何時間もかけてどうにかこうにか死体を運び終えた頃には、口もきけないほど疲れ果ててしまっていました。あまりに疲れたため、もう悲しむ気力さえ残っていないほどでした。あのとき、馬の死体を片づけるために汗だくになって体を動かし、力を出しきったことが、結果的には私の魂を救ってくれたのです。悲しいときは、じっとしてはいけません。とにかく体を使って動きまわることだ。痛切にそう思いました。

人が死ぬと、遺族は悲しむ暇もなく葬式の準備のために立ち上がり、何日も何週間も奔走しなくてはなりません。初七日、二七日(ふたなぬか)、三七日(みなぬか)、四七日(よなぬか)、五七日(いつなぬか)、六七日(むなぬか)、満中陰(いわゆる四十九日)、百か日、一周忌、初盆、月命日……と次々に法要が営まれるわけですが、あれはもしかしたら、残された人たちを悲しみから救うための儀式ではないか。そう考えれば、死んでから「お葬式」で周囲に迷惑をかけることは、あながち悪いことばかりではないという気がします。

そもそも、生き物の死の基本は「野垂れ死に」でしょう。私はヒマラヤが大好きで、年に一度は出かけていますが、ヒマラヤの奥地には病院はおろか薬局さえないので、ちょっと風邪をこじらせただけでも、人はとても簡単に死んでしまう。日本なら病院に担ぎ込まれ、喉や鼻からチューブを差し込まれて寝たきりで生きてゆくことになる場面でも、医療の乏しい場所ではそのまま「さようなら」です。

いつ、どこで、どんなふう死ぬか。それは、そのときになってみないと誰にもわかりません。しかし最後はみんな「死体」になり、多少なりとも誰かに迷惑をかけてしまうのです。最後に鳥や魚の食べ物になるという葬送のやり方は、死ぬ時もせめて誰かの役に立ちたいと願う、人間らしい一つの想いのあらわれなのかも知れません。

《 [第6回 不思議なご縁](#) [第8回 生まれ変わり](#) 》

山田 真美（やまだ・まみ） プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士（高野山大学）。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。

1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学（豪）でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェローシップを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。



山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>

マインドフルネスの科学

スポーツドクターが一流アスリートの脳波を調べ、今に集中する方法がわかりました...続きを読む> flowmind.jpへ進む



[▲このページの先頭へ](#)



© 2002-2016

真言宗豊山派 金剛院

[永代供養墓 密厳霊塔](#)

[しいなまち みとら](#)

[こんごういんキッズ](#)

[メディアで紹介](#)

[ぶつぶつ雑記ブログ](#)

[唱えてみよう!](#)

[たいけんしてみよう!](#)

[東京お寺めぐり](#)

[ぱぱぱのレシピ](#)

[真言宗について](#)

[仏教いちねんせい](#)

[まんが 小坊主くん!](#)

[ぶつ仏クイズ](#)

[ふしぎな密教法具](#)

[金剛院イベント情報](#)

[金剛院NewS](#)

[金剛院について](#)

[金剛院の四季](#)

[地図・アクセス](#)

[メールを送る](#)

[おすすめリンク集](#)

[バックナンバー](#)

[サイトマップ](#)

もうすぐなくなる仕事—29選

仕事なくなるのは良いこと？悪いこと？”奪われる”だけではない職業の真実
directsales.jpへ進む

